

研費・基盤研究 A

「天文学との連携にもとづく考古学・考古史学研究法の構築」(19H00544)

# 七夕に関するフィールド調査

研究成果報告書<令和4年度>

「富山地方の七夕現地（追加）調査」・「札幌市東区のろうそくも  
らいほか七夕事例調査」を中心として

令和4年12月5日

今野利秋

# 第一章 本年度の調査の概要

## 1. コロナ禍の継続による影響と本年度の計画

相変わらずコロナ禍は続き、感染力が増して患者数が増大する一方で重症化する人の数は減るといった傾向に変わった。このような状況から感染対策を徹底にしたうえで、規模の縮小等はあるが、各地で七夕の行事が開催された。仙台、平塚、安城の三大七夕に代表される商店街の七夕をはじめ、青森、秋田、高岡、京都、山口、大分などの歴史ある七夕などである。他方、地方での村の行事的な七夕も開催されるに至った。だが、感染力の強さから、子供たちの行事への関与が制限されたり、行われなかったということが生じた。大規模なイベントは早々に開催が決まったが、地方の行事はやはり一か月を切っても開催するかどうかの判断をしているものもあり、調査日程の決定が遅くなることもあった。

### (1) 現地調査の継続

引き続き、現地に足をできるだけ運ぶことを試みはしたが、以下にあるものはどれも実現せず。富山県関連の現地（追加）調査については第二章で後述する。

- ・ 思川の流しびな（7月第一日曜日）：栃木県小山市で紙人形を藁船に乗せて、子供たちが願いを込めて川に流す行事で、夏の時期と紙人形、願いから七夕との関連を疑った。市の商業振興課に照会したところ、コロナ禍で子供たちは参加せず、大人が小規模で行い、コロナ禍が明けたらお越しく下さい、との回答を得た。行事本来の姿でないことやコロナ禍という要請も鑑みて調査を断念。
- ・ 祇園祭宵山（前祭 7/14-16、後祭 21-23）：京都府京都市。子供たちが歌うろうそく売りの歌と、北海道のろうそくもらいの関連についての調査。3年ぶりに祇園祭が開催され、自身の都合もつけられたが、子供たちの参加が見込まれないとの事前情報を得て、調査を断念した。
- ・ 由比北田の天王船流し（7月第三土曜日）：静岡県静岡市で行われる麦藁舟に災いを託して海へ流す天王信仰系の行事。厄を船とともに流す意味合いや、富山の虫送り系七夕で流す船に似ていること、そもそも祇園祭も天王祭である事、牛頭天皇が牽牛との関係で語られる七夕伝承があることなどから興味を持った。当日は低気圧横断による天候の悪化と、行事の実施や交通機関への影響が見込まれたことから調査に赴くのを断念した。行事の実施は不明。文化庁より記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（選択無形民俗文化財）に選択されており、昨年と今年が調査の年とされているので、次年度以降、調査報告書が出される可能性がある。
- ・ 中陣のニブ流し（7/31）：富山県黒部市の中陣地区での眠り流し系の行事。子供たちが麦わらなどで作った船を集落の川に流す。同じ川の上流でも同様の行事があり、今回は日程上も都合がついたが、子供たちが中心ということで現地に赴いて今年の中

止を知るという結果になった。だが、こちらも記録作成等の措置を講ずべき無形の文化遺産であり、令和3年度末に報告書が作成されていることを知り入手した。

## (2) ろうそくもらいに関する調査

7月が近づくと、他の地域に先んじて7/7にろうそくもらいが行われる函館のニュースとして、今年はろうそくもらいを学校としてコロナ禍を理由に中止させる措置は取らないとの情報が入った。実際、函館市内では通常通りに行われた。このことから月遅れの8月の道内の他地域でも同様であろうという希望が出てきた。そこで、札幌市内の知人に聞いてみたところ、今年を行うとのことであった。行事に来る子供たちの親に撮影等を承諾してもらい、行事の様子を記録することができた。詳しくは第三章で後述する。

## (3) 道内市町村史誌での七夕行事調査

別件と絡めて、旧道内 212 市町村の市町村史誌内での、七夕行事についての記載を調べた。自治体の数も多く、目下、およそ 50 余の市町村の調査が終わった段階である。また、図書館にて北海道新聞社の過去記事のデータベースにアクセスし、七夕の記事を検索した。詳しくは第四章で後述する。

## 2. 調査日程

実際に調査に赴いたのは、7月に富山県、8月に帰省を利用しての北海道である。コロナ禍に配慮し、検温、消毒、マスク、密の回避等の感染予防策を行っての訪問である。

### (1) 7月30日、31日

富山県黒部市、滑川市、富山市で調査をした。

7月30日

- ・富山市西町 5-1：富山市立図書館

7月31日

- ・富山県黒部市中陣 556（黒部市立東中陣公民館）：中陣のニブ流し ※中止
- ・滑川市中川原 410（中川原海岸）：滑川のねぶた流し

### (2) 8月7日、8日、9日、12日

帰省の折に北海道札幌市で調査をした。

8月7日

- ・札幌市東区：知人宅にてろうそくもらい実施

8月8日、12日

- ・札幌市中央区南 22 条西 13 丁目 1-1：札幌市中央図書館

8月9日

- ・札幌市中央区北 1 条西 1 丁目札幌市民交流プラザ 1・2 階：札幌市図書情報館

## 第二章 富山県における現地調査の成果

### (1) 調査エリア

黒部市／滑川市／富山市

### (2) 調査の結果

#### 1) 黒部市

先述のように今年は各地で七夕行事が行われ、7月31日が週末で時間がとれることもあり、「中陣のニブ流し」の調査に出かけた。昨年は、日程が重なる富山県内の「滑川のねぶた流し」の調査に赴いており、今年こそは調査に来ようと思っていた。

16時前に中陣ニブ流し伝承者養成館前に広場に着いたが、周辺に人の姿が見当たらない。中陣公民館に向かうと、コロナ禍で今年の行事の中止を伝える張り紙があった。子供の行事ということで中止となったのであろう。行事そのものを目にすることはできなかったため、行事のあらましと、行事が行われる場所や周辺の景観を報告する。

#### ■中陣のニブ流し

文化庁「文化遺産オンライン」(<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/358484>)によると、「眠り流し系統の行事で、子供たちが麦藁や色紙等で小型の船を作り、川に流して送る。ニブとは、ネブタと同じ語源を持つ呼称で、睡魔を意味するとされ、ニブ流しは、夏の時期に農作業等の労働を妨げる眠気や心身の穢れを作り物の船に託して流し送る行事であると伝えられている」「7月最終日曜日の夕方に地区を流れる前川で行われる。子供たちは、中陣ニブ流し伝承者養成館の広場に各自で製作した船を持って集まる。一同が揃うと列を組み、船を曳きながら集落内を練り歩く。その後、子供たちは伝承者養成館前の土手から川に入り、下流のニブ橋までの間を歩きながら船を押し流す」とある。

#### ①中陣ニブ流し伝承者養成館（富山県黒部市中陣 558）

令和4年7月31日16時ころ訪問。

行事が、富山県無形民俗文化財に平成6（1994）年に指定されたことで、県と市の補助を受けて平成9（1997）年に公民館の隣に建設された。この時に和太鼓や笛などのお囃子の道具、そろいの法被や鉢巻なども整えられたという。

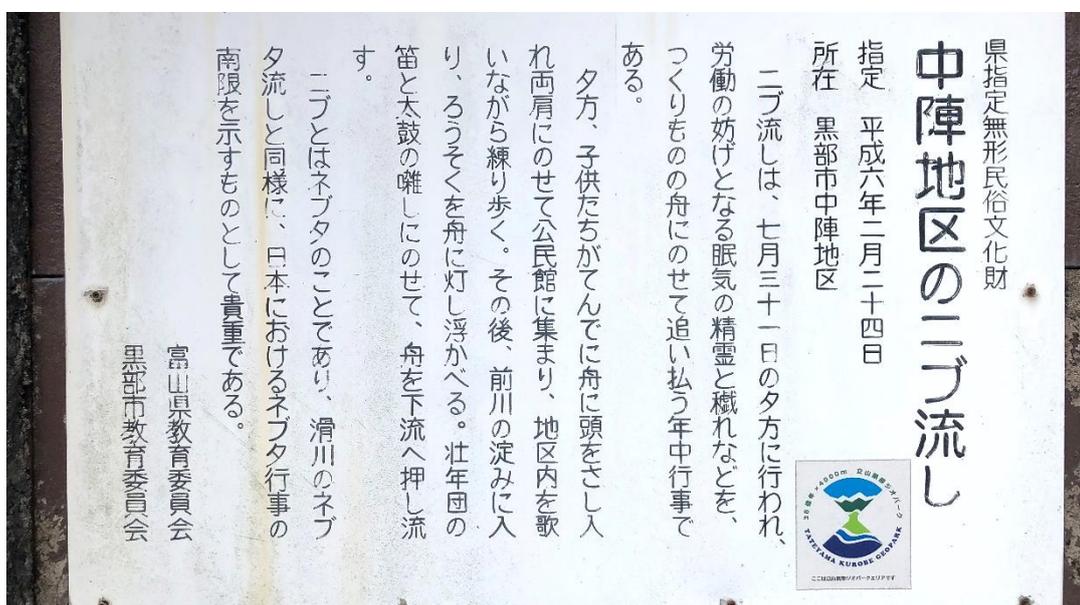
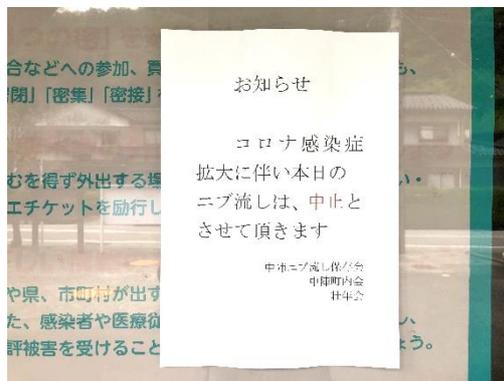
（尾山の七夕流し・中陣のニブ流し調査委員会（2022）、「尾山の七夕流し・中陣のニブ流し 調査報告書」pp141）



②中陣公民館（富山県黒部市中陣 556）

令和4年7月31日16時ころ訪問。

行事の後の慰労会などが行われる。公民館の前には、ニブ流しの説明看板がある。



③大谷川（通称は前川）

中陣集落の南側、ニブ流し伝承者養成館の目の前を流れる小川。子供たちが夕方になると麦わら舟を流す。富山県無形民俗文化財指定を受けて、平成10（1998）年に子供たちがニブ流しを行う範囲の護岸が整備された。





## 2) 滑川市

ニブ流しが中止ということで、昨年も訪れた滑川市での「ねぶた流し」開始の時間には何とか間に合うので、滑川駅で下車して会場となっている海岸へと急いだ。

海岸では、ちょうど藁や板で組んだ「ねぶた」に点火される場所であった。

### ■滑川のねぶた流し

文化庁「文化遺産オンライン」(<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/159928>)には、「この行事は、眠気や穢れを海に送り出す行事である。ネブタと呼ぶ作り物を作り、ナスやキュウリなどの飾りものや紅白の御幣を刺し、町内を練り歩いた後、浜で点火して海に流し出す」とある。

ねぶた流しという名前にもみられるように、今回見られなかった「中陣のニブ流し」、その隣の集落での「尾山の七夕流し」同様の行事であり、広い意味での七夕行事であると考えられる。柳田国男は「年中行事覚書」の中で、眠り流し行事の日本海側での南限であるとしている。

丸太で組んだいかだにタイヤのチューブなどの浮き具を取り付けた土台を作り、青竹の芯を立てて、周囲に藁を巻き付けた松明を載せた「ねぶた」を作る。そのねぶたを、海上に降ろして火をつけ、燃やし尽くして穢れや眠気を海へと流す。

昨年、コロナ禍で有志により二年ぶりに再開され、今年はいつも通りの開催となった。市内の9団体（中川原町内会、常盤町1区町内会、常盤町2区町内会、吾妻町町内会、滑川東地区公民館、滑川西地区公民館、滑川青年会議所、寺家小育友会、滑川市役所）が参加して、10基のねぶたが流された。ねぶたにはキュウリやナス、紙で作られた人型や、七夕飾りが取り付けられる。中川原地区では、ねぶたを櫛原（いちばら）神社の禊場に持ち込んで禊を受けている。



### 3) 富山市

ニブ流しの行われる前日が土曜日であったので、7月30日から富山県入りし、富山市立図書館にて文献を探すこととした。

#### ■「尾山の七夕流し・中陣のニブ流し 調査報告書」

中陣のニブ流しは、文化庁により「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」([https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/categorylist?register\\_id=312](https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/categorylist?register_id=312))に指定されている。同文化財として年中行事は61件が指定されており、七夕関連では「金津の七夕行事」(宮城県角田市)、「大磯の七夕行事」(神奈川県大磯市)、「尾山の七夕流し」(富山県黒部市)、「八代・芦北の七夕綱」(熊本県八代市・芦北町)がある。大磯、八代・芦北に関してはすでに報告書が作成され、入手していた。今回の調査前のネットリサーチによって、尾山と中陣の報告書が今年令和4年3月に完成したことを知った。市立図書館に所蔵が確認され、両行事に関連するページを複写することができた。今年は見ることができなかった中陣のニブ流しの行事の様子や由来、歴史等が克明に報告されている。

- ・書名：「国選択 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財  
尾山の七夕流し・中陣のニブ流し 調査報告書」
- ・調査・編集：尾山の七夕流し・中陣のニブ流し調査委員会
- ・発行：黒部市教育委員会
- ・発行年月日：令和4年3月

### (3) 調査のまとめ

空振りに終わったが「中陣のニブ流し」に加えて、これまで、富山県内の眠り流し系の行事としては、中陣集落から1キロほど山に向かった尾山地区で8月7日に行われる「尾山の七夕流し」、先述の「滑川のねぶた流し」を訪ねた。富山県教育委員会文化財課編集(2002)「富山県の祭りと行事 ー富山県祭り・行事調査報告書ー」には、当時すでに行われていないものも含めて、多くの眠り流し系の事例が記載されている。入善町2、黒部市2(つまり中陣と尾山)、魚津市4、上市町2、立山町2、滑川市3(ひとつはネブタ流し)、富山市2である。これらは県中央から東部の地域であり、西部や南部で事例は認められない。南部では南砺市に、藁舟を流す「荒木ねつおくり祭」という七夕を訪ねたことがあるが、これは稲につく病虫害を流す虫送りとの習合である。災いを流すという意味では眠り流しと通じるものがあるが、性格としては農耕の行事の側面が強い。そして南部や西部には、七夕と結びついているわけではないが虫送り行事が多い。こうした分布の理由については興味のあるところであり、今後の課題の一つになり得よう。

主に、眠り流し系に注目したのは、北海道のろうそくもらいが青森のねぶたの影響を受けていること、多くの人々が富山県から北海道に入植していること、そして北前船の寄港地がある事から、何か関連性が見いだせないかと思った次第である。残念ながら直接的な関連は見いだせていない。ただし、射水市堀岡では、8月7日に子供たちが提灯をもって「竹に短冊 七夕祭り 盆に踊れば いちゃけに(可愛げに)踊れ」と歌を歌って地区をめぐる行事があり(射水市新湊博物館の学芸員情報)、砺波地方には、子供が6月の10日、11日の夕方に田楽行灯(高さ50センチ、横30センチ程度)を持って各家を回って歌を歌い、歌い終わると各家庭から菓子などが渡される田祭り行事というのがあるという(砺波郷土資料館の学芸員情報)。これらは、ろうそくもらいに似通っているところがあり、今後の調査の対象として考えているところである。

## 第三章 ろうそくもらいについての調査

今年、数年前に訪問した鹿児島県いちき串木野市での「七夕踊り」が、後継者や人手不足などの問題があって、いったん休止となるかもしれないという年であった。本来であれば、二年まえにそうなるはずであったが、コロナ禍で行事の実施ができずに延期を重ねていた。この行事が行われるのは8月7日であり、できれば最後を見ておきたかったが、なかなか行事を執行するか否かが決まらなかった。帰省のための航空機の予約や日程調整等もあり、結果としては月遅れの七夕の時期に帰省をするを選んだ。知人に照会したところ、ろうそくもらいに子供たちが来るかもしれない、との話を聞いていたからである。かくして、自分が子供のころから実に40年ぶりくらいに、リアルなろうそくもらいと再会することとなった。当の「七夕踊り」は実施されて最後を迎えたことを、後日、地元新聞社のWEBニュースで知った。

### (1) 調査エリア

札幌市

### (2) 調査の結果

#### 1) 知人宅（札幌市東区）

訪問は令和4年8月7日の16時頃。

帰省を月遅れの七夕に合わせたからには、どこかでろうそくもらいに立ち会いたかった。名寄、旭川の知り合いに聞いてはみたが有益な情報は得られなかった。そこで、札幌市内の知人に聞いてみたところ、先述のように「今年はやるかもしれない」との回答を得た。「今年は」というのは、この二年間、コロナ禍で学校からも「ろうそくもらいを控えるように」と通知が出ており自粛がされていたが、重症化のリスクの低減やワクチン接種等で状況が好転したからである。

#### ■ろうそくもらい（ろうそくだせ）

ろうそくもらい、は北海道独自の七夕の風習である。とはいっても道内のすべての地域で行われているというわけではない。その地域の成り立ちや歴史などにより、同じ自治体内でも行うエリア、行わないエリアが混在している。大別すると、函館では7月7日、その他道内地域は8月7日の夜に、子供たちが集団となって近所の家々を回ってろうそくをもらう行事である。近年では（すでに40年くらい前から）ろうそくに代わってお菓子を配ることが主流となっている。自分が子供の頃は町内の家々を好き勝手に回っていたが、都市化や他地域からの行事を知らない転入者による苦情、あるいは現金をよこす家なども出たために、主に学校側やPTAがルールをいくつか決めているところが多いようである。お菓子を配る家や商店を輪番制としていたり、担当となった家や商店は目印の飾りを掲示して子供たちには目印のある所だけを回るように指導したり、現金を配る事の禁止、等である。

## ■今回のろうそくもらい

### <参加者>

- ・知人の小学5年の長男、小学2年の長女
- ・長男のクラスメイトの男子3人、女子1人



### <概要>

16 時頃に子供たちが近くの公園や家の前に集まる。全員がそろったところで知人宅のチャイムを鳴らして家人が出てくると、子供たちは一斉にはやし歌を歌う。歌い終わったところで、家人が子供たちの人数を確認。お菓子が小分けにされたビニル袋を取りに一旦家の中へと戻る。子供たち一人一人に小分けの袋が渡されると、子供たちはお礼をして去っていく。自分が子供の頃は、何軒も回っていたが、そういうことはなかった。

知人宅にろうそくもらいの子供たちが来るのは、コロナ禍により 2020 年以來とのこと。その際には、今回参加をしたメンバーを中心として、地域の家々だけでなく、商店街の某有名菓子店や某チェーンハンバーガーショップを訪ねるなどしていたこともあるらしい。都市部にあるような輪番制や目印掲示などのルールは、少なくとも知人の周囲ではないとのことであった。

### <歌詞>

大別すると、函館では「竹に短冊 七夕祭り 大いに祝おう ろうそく一本頂戴な」であり、小樽では「今年は 豊年七夕まつり ろうそく出せ 出せよ 出さねば かつちやくぞ おまけに 食いつくぞ 商売繁盛 出せ 出せ 出せよ」、その他道内地域の多くでは「ろうそく出せ 出せよ 出さないと かつちやくぞ おまけに 食いつくぞ」である。函館は上品であり、他はかなり乱暴なのである。小樽は両者の中間的である。東区の子供たちは、「ろうそくだせ だせよ ださないと ひっかくぞ おまけに かつちやくぞ」と歌っていた。かつちやく、は北海道弁でひっかくの意味なので蛮行が重複してしまっている。もっとも、この「かつちやく系」の歌詞も地域差や親から伝わっている時の差などがあり、どれが正しいとは言えない。少なくともここ東区のこの子供たちには、「かつちやく系」のいささか乱暴な歌が伝わっていることは確かである。

### <行事の系譜>

知人の長男は、2年生時に（おそらく）転校生であるクラスメイトに誘われたのがきっかけとのこと。転校生がどこからの転入かは不明で兄がいたとのこと。すでにクラスにろうそくもらいを知っている子が何人もいたらしい。長男が幼稚園の時に、保護者の間でも話題になったことがあるが、親が一緒について回れないということで実施を断念したらしい。知人はかつて市内の手稲区に住んでおり、小学4年生当時はこども会のイベントとして、委員に知っている人がいて、あらかじめ打ち合わせしていた家を順番にみんなで回った記憶があるとのこと。比較的新しい住宅地だったので、こういう感じになったのでは、と推測していた。奥さんは、小学生の時から友達との話の中で知っていたとのことだった。

## 2) 民放テレビの情報番組

ろうそくもらいの前後は、NHK ローカルのニュースで取り上げられていたり、今年は、どういった理由なのかがわからないがローカル民放の情報番組で3番組、ろうそくもらいの特集をしていた。3年ぶりにろうそくもらいが各地で行われたということで関心が高まったか、ルーツを見つめなおそうとの声が出たのかもしれない。また、ねぶたも3年ぶりに行われ、取材にも行きやすかったということがあるのかもしれない。

### ■【北海道の謎】ロウソク出せは、どこから始まったのか?・・・

(北海道放送・『もんすけ調査隊』8月5日放送「今日ドキッ!」内)

<内容>

道内の七夕は多くが8月7日だが、函館は7月7日であることを切り口として、函館で取材。函館のろうそくもらいの映像とともに、昔はろうそくを集めていたが、今はお菓子に変わったこと、道内で地域によって歌詞が異なる事を紹介。1892年創建の市内湯川寺の筒井章順副住職に取材し、「函館では江戸時代後半から、ねぶた祭りの様なことが行われていて、それが始まりらしい」とのコメントを得る。

『函館風俗書』の内容を、北海道大学文学部の谷本晃久教授に取材。「七夕祭、大額燈籠は、方式間余りに、囃子屋台やうの者を、四ツ車のうへに組み立て」との部分を引き、「青森のねぶたの山車みたいな物を作って、灯籠は1000ぐらい出ると書いてある。町中が灯籠で埋め尽くされるイメージ」とコメント。番組は、松浦武四郎の「秘めおくべし」にも、函館のねぶたのような祭りについて記述されていることも紹介。

ろうそくの由来について谷本教授は「函館に偉い郷土史の先生がいて、須藤隆仙先生が、函館と青森の青函文化史という本を書いており、なぜロウソクをもらって歩くかというの少し書いてあり、ねぶたには数百のロウソクが飾られていた。どうも各家を回って、子どもたちがロウソクを集めて、ねぶたを飾った。それが残ったんじゃないか」とする。番組は、明治に節句が廃止されてねぶたが廃れても、子どもたちのろうそくを集めて回る風習だけは残ったと考えられている、とする。

ねぶたとの関係を探りに取材班は青森へ。ねぶたの家ワ・ラッセ佐々木琢也係長は「ねぶた祭りは、七夕祭りの行事の一環で…」「眠気を流すための行事として始まったのが有力な説とされている」とねぶたの由来を語り、ろうそく出せと「実は似たようなところがいろいろあって、昔は人形の灯籠の中に、ロウソクの明かりで灯していたので、運行中に、子どもたちが『ロウソクを出せ出せ! 出せ出せ!』という回り方をしていたのが、ラッセラッセ、ラッセラー、ラッセラーという掛け声の由来だと言われている」とする。

番組は、ろうそく出せは、ねぶたにルーツがありそうだと締めくくる。

<所感>

概ねこれまで知られている内容ではあったが、出てきた文献が参考となる。須藤隆仙氏の「青函文化史—初めて綴られた日本北辺の文化動向」(1992)、東洋書院、は未見であり、近隣では日野市の図書館に所蔵されているようなので、折を見て内容を確認に行きたい。また、松浦武四郎の「秘めおくべし」もどこかで内容を確認したい。

■【短冊に願い】北海道の七夕なぜ8月？ 全国的には7月 ルーツをたどると…  
(札幌テレビ・【どさんこワイド179】内のナゾトキのコーナー 8月8日放送)

<内容>

北海道の七夕が8月7日である理由として、北海道開拓の村の学芸員の平井郁（かおる）さんは、新暦への切り替え時に8月にしたこと、お盆の準備からも季節感的に8月になったであろうこと、冷涼で作物の育成が本州より一か月遅れるなど解説。

函館が7月である理由を、はこだて検定合格者の会会長の山本和雄さんに取材。函館も8月であったが八幡宮の例大祭と重なるのでお盆と七夕をずらしたという歴史を紹介。

後半はろうそくもらいの考察。道内での実施分布調査結果や歌詞の違いに触れ、ろうそくをもらう理由を再び山本氏が解説。江戸時代の七夕では子供たちが灯籠を担いで回ったが、それに使うろうそくを集めて回ったのが由来とのこと。「箱館風俗書」には「七夕の日に大灯籠を引き回して大賑わいであった」とあり、山本さんは、ねぶたのような大灯籠行事がなくなっても、ろうそくを集める風習だけが残り全道に広がったとする。

<所感>

「箱館風俗書」、「松前紀行」、「秘めおくべし」以外に江戸や明治の文献を探し出すことができる、さらに当時の様子がわかるのだろう。

■福永探偵社～新説！ロウソクもらいの謎

(札幌テレビ・【どさんこワイド179】8月10日放送)

<内容>

ろうそくもらいの分布や歌詞の違いを紹介後、小樽市高島のろうそくもらいが青森ねぶたに似ている点を取材。今は高島地区のろうそくもらいは廃れているという。高島は新潟からの入植者が7割を占め、旧紫雲寺町藤塚浜の盆踊りが今も継承されており、青森からも数パーセント入植している。取材を受けた男性の父方は村松浜からの入植とのこと。地区のろうそくもらいでは、集めたろうそくを換金してねぶたに使ったという。「松前紀行」から函館のねぶたに似た行事を引き、青森県立博物館へと取材は進む。

学芸主幹の小山隆秀さんは、昭和50年代に青森ではろうそくをくれないとカッチャクゾ、という歌詞があった事を証言し、館内にある子どもねぶたを紹介。弘前で昭和初期に使われ、ろうそくで火を灯し、提燈の絵を描くときにも使っていたという。ねぶたでたくさん消費するろうそくを、ろうそくもらいで集め、余分はお金に変えて翌年のねぶたの資金とした。「ラッセーラッセー」の掛け声は、もともと「出せ出せろうそく出せ出せ」が訛ったとする。番組では、幕末から明治にかけて「ねぶた」とともにろうそくもらいが北海道に伝わり、やがてろうそくもらいの風習だけが残り続けたとする。

続けて、日本民俗地図（1969）の新潟県村松浜に、「竹に短冊、七夕様よ、ろうそく出せ出せ、出せよ、出さねばかっちゃぐるぞ」と歌いながら村を練り歩く七夕行事があったことに触れて、取材班は村松浜へ。地域の住民から、七夕で「ろうそく出せ、出さねばカッチャクゾ」と歌ったとの証言が取れる。村松浜七夕船飾り製作伝承会の平野庄一さんによると、地域の七夕行事でろうそくを集めていた。子供たちが手に手に行燈を以て練り歩き、ろうそくは燈籠に使ったという。村松浜では、麦わらでつくった「七夕舟」に、男の子がいる家は騎馬武者人形を、女の子がいる家はひな人形をつくり、人形を舟

にのせて海に流してお盆を迎えていたとのこと。

最後に京都先端大学の川田耕教授に取材。七夕行事が普及すると寺子屋で七夕に願い事の字を書くことから理由は不明だがやがて子どもの遊びの文化となり、短冊などを持って練り歩くことをやった。ろうそくもらいと同じような練り歩きを伴う七夕として、宮城県川崎町「オックレヨ」、宮城県角田市金津・古歌を唱和、新潟県沿岸各地の船送り、富山県立山五百国の行列、茨城県取手市「七夕くろよ」、神奈川県大磯、愛知県安城町・夜の遊びまわり（※今野：安城市の誤りか?）、岐阜県国府町「オオザイ」、大阪各地「ほうづきとつてもかまへんか」、鹿児島県国分市「ネブイハナシ」が地図上で紹介。教授は社会的な意味合いとして、七夕は普段やってはけないことを大人が公認して子供たちが夜に行える、地域社会全体で子どもたちの成長を見守りサポートする文化だとする。番組は各地で廃れているものが北海道で残っていることは貴重だとする。

#### <所感>

一番得るものが多かったのがこの番組。小樽の高島地区と新潟県の接点と、実際に村松浜に赴いての取材であった。村松浜の七夕船で、同様の歌が歌われることは承知していた。新潟県民俗学会の金田文男さんへのメール聞き取りにより、村松浜の七夕船は旧村松浜のある胎内市立築地小学校の学校行事に変わったとの情報を入手し、調査に行きたいと思っていた。だが、コロナ禍となり学校行事はずっと中止されてしまっていた。コロナ禍収束の際には、調査候補としてもっとも順位が高い対象行事である。

練り歩きの七夕として紹介されているもののうち、金津七夕、大磯の七夕は過去に調査してはいたが、他にもまだまだ事例がある事は、東根や秋田などの調査などでも感じていた、提灯行列が七夕行事の大きな核をなす要素である、という思いの支えとなる。メールでの調査で、盛岡や富山県内にも似た行事があるとの情報もあるし、秋田県内のねぶた流し行事も規模の小さなものでは同様のものがある。まずは、WEB や文献にて紹介されていた事例を調べてみようと思う。

### (3) 調査のまとめ

自分が子どもの頃に実際に行ってから実に40年ぶりくらいの、ろうそくもらいとの再会であった。昔と今では状況や形態は異なっているように見えるが、行事が続いていることが単純にうれしく懐かしかった。しかし、テレビ番組でも述べていたが、ろうそくもらいが健在ではあるが、地域によってはコロナ禍も手伝って失われつつあり、体験したことの無い子供がいるということには危機感を持った。

所感に個別に書いたが、STVの特集での新潟とのつながりの実際の取材は得るものが多かった。コロナ禍という状況もあり、自分の調査は富山県が中心となっていたが、新潟県に実際に赴きたい。しばらくは現地調査ができる社会状況になることを願いつつ、入手した文献の検討と考察を行っていく。また、子どもの練り歩きについても、提燈、歌、行列、得るものの有無（お菓子など）の視点からの分類をしていくことでも、新たなものが見てきそうな気がする。

やはり、ろうそくもらいは本州からの文化流入のようではあるが、北前船、開拓期の入植、祇園祭との関連、などはまだ調査課題のテーマとしては依然大きく残っている。開拓期の入植で言えば、村松浜の事例にみる新潟県の入植先との関連性に比べて、富山県からの直接的な関連性が見つかっていないことも、実は大いにひっかかっている。これらも次なる課題であると考えている。

## 第四章 文献での道内の七夕行事調査

今年度は文献調査も継続した。道内のかつての七夕行事を探る手立てとしてはまず、各自治体が発刊している市町村の史誌がある。史誌には自然や歴史、文化、民俗など幅広い内容が記載されており、編纂がされた時代や過去の様子を拾うことができる。そして次に、新聞記事があげられる。道内のどこでどのような七夕行事があるのか、過去や現在について行事の様子などを含めてのかなり具体的な情報を拾うことが可能となる。

市町村史誌に関しては、七夕に加えて、アイヌ語の天体関係地名、明治から昭和にかけて6回あった道内皆既日食と金環日食も合わせて調査しているために、一冊の史誌を終えるにはそれなりの時間を要する。

### (1) 市町村史誌での調査

#### 1) 対象としている市町村史誌

- ・旧212市町村をベース：  
多くの史誌が平成の大合併前に出されているため。
- ・札幌市中央図書館と東京都立中央図書館で見られるもの：  
帰省の際に行けることと、東京でも道内の市町村史誌が豊富であるため。  
同じ自治体でも、新旧、続刊、輔弼、別冊など複数あり、札幌に無いものが東京にある、その逆もあり。この2施設でかなり網羅している。
- ・「～の歴史」、「～の昔」、「～100年の歩み」 など類書も含む

#### 2) 調査方法

- ・上記2図書館のオンライン検索：  
史誌、類書を極力全部ひろうため。ヒットした書籍はすべて確認する。
- ・基本は見出し、小見出しで掲載かどうか判断：  
史誌の見出しにはほとんどの場合は細目があり、時には民俗や年中行事の項目が設けられていることがある。無い場合は、文化、生活など、類するジャンルの項目のページを見ていく。全ページ読むわけではないので、この方法では調査に漏れがある可能性は承知の上である。

#### 3) 調査の現状

思った以上に対象となる史誌あるいは類する書籍が多く、報告書作成段階ではおよそ50市町村と、対象自治体の1/4である。その中で七夕に関する記事がある一定量具体的に認められている（年中行事に単に七夕などと記されているのではなく、本文中に記述がある）のは、12自治体の14史誌であった。別件の調査の都合上、今の調査は道北から道東が中心だが、道南の史誌には青森ねぶたとのつながりなどが書かれていることもあり、道央、道南と進めてくと、今後は七夕関連の記述が増えるかもしれない。

- ・利尻富士町史（1998）pp1199：8月7日に子供たちが柳を切ってきて色紙や短冊に文字や裁縫の上達を願い飾る。夕方になると空き缶のカンテラや紙灯籠を手に、行列を作って近所の家を回りろうそくやお菓子をねだる。「ローソク一本出せよ、出せ出せ出せよ。出さねばカッチャクぞ、おまけに食いつくぞ」と歌ったとある。
- ・新幌延町史（2000）pp1278：子供たちが柳を切って短冊を結び付ける七夕を行ったのが鉄道開通後のことらしい。昭和49年からは交通安全七夕パレードを実施している。
- ・開基百年上湧別町史（1997）：冒頭のカラーグラビアに、商店街七夕風の飾り写真。
- ・中標津町史（1981）pp1188：昭和40年ころまでは年中行事の一つであった。柳の枝に願いを書いた色紙の短冊をつるす。夜には提灯やカンテラを手に家々を回り歩いた。歌は「ローソクだせ、だせよ」。子供会の花火大会や、七夕飾りを標津川に流す「七夕送り」が河川を汚すことで禁止されたことにより廃れた。
- ・音別町史（1985）pp1138：8月6日の夜。七夕提灯や缶詰の空き缶に針金で把手をつけたカンテラを手に、5、6人が家々を回ってろうそくや飴、お菓子をもらい歩いた。歌は「ローソクだせ だせよ ださないと カッチャクぞ おまけに 食いつくぞ」。大正時代の中ごろには既にあったらしいがいつどこから入ってきたのかは不明。風習がなくなったのもいつか定かではない。
- ・旭川市史第三巻（1959）pp826：柳に色紙を短冊状にして飾り天の川やお星さま、自分や友達の名前を書く。お梯子型やかご型にしたり、折り鶴なども下げる。キュウリやナスも飾られる。暗くなってくると、手に豆ちょうちんや缶詰の空き缶で作ったとうろうをもって、10、15人と家々を回ってろうそくをもらう。歌は「今は豊年、たなばたまつり。ろうそく出せ、出せ。出さなきや、かっちゃんぞ。おまけにくいつくぞ」。翌朝、柳を飾りのまま川に捨てる。
- ・新旭川市史第二巻通史2（2002）pp844,845：明治33年の北海道毎日新聞の「夜に入りては多くの小供等が例の柳の木に小提灯を結び付け田楽灯籠を担ぎなどして竹に短冊七夕祭りよと囃し立て市中を噪き廻り又二組三組のホーカイ節が門付けをなし歩くなど市中は何んとなか賑やかに随って人出も何時もよりは多かりし」を引用し、法界屋と七夕で子供たちが家々からろうそくやお菓子をもらうのを重ねているのでは、としている。
- ・美唄市百年史通史編（1991）pp702：笹竹の代わりに柳に短冊を下げて、家々に線香花火を楽しんだ。「大正期になると市街地とその周辺、および炭鉱地域で、子どもたちが小さな提灯をさげて「ろうそく出せ、出せよ」と近隣の家々を回るようになった」と注目すべき記載がある。

- ・小樽市史第一巻（1958）pp756：旧暦7月7日に七名祭。後改めて一と月送り八月七日となる。とある。七名祭は七夕のことと思われる。
- ・新札幌市史第二巻通史2（1991）pp928：明治期の年中行事一覧表の8月に七夕とあり、「市中蠟燭せがむ声かまびすし」とある。
- ・伊達市史（1994）pp1262、1332、1333：八月六日の夕方から七日にかけて、笹竹に短冊をさげて七夕飾りをする。大根畑にさすと虫がつかない、との口伝を紹介。六日の夕方に子供が数人集まって、ろうそくやお菓子などをもらって歩く行事が、市街地を中心に昭和42年頃まで行われていた。歌は「ローソク出せ、出せよ、出さねば、カッチャクゾ、おまけにクイツクゾ」。関内や稀府では見られないとある。  
さらに、別章では歌を音符付きで紹介し、解説文には「子どもたちが集まって、歌いながら近所を廻り、蠟燭や菓子などをもらった。貰った蠟燭は盆の一三日に仏様にあげた。青森県のネブタの行事で同じ歌を子どもたちが唱えて歩いたものであった。江差ではミニチュアの山車を子どもが七夕に曳いて同じ歌を囃す」とある。
- ・函館市史第一巻資料編（1974）pp293、294：史誌には弘前の文人で画家である平尾魯仙が安政2（1855）年に函館を訪れて記した『松前紀行』の弘前出発以降から青森着までの間が抄録されている。そこに函館の七夕の記録がある。  
「七夕祭は隔年に在て{一年は、八幡祭、一年は、七夕祭り}最壯観なる物なり。男女の小児學中にあるもの、貧富共みな一つつつこしらえる事とぞ。其形は吾邦（津軽）の額ねぶたと云うものにて、大きさは大略一尺三、四寸に、二尺四、五寸にて小縁と大縁は表面許に飾り、額面には七夕祭・二星祭などと文字を書き、両脇は画を模し、後面は何氏の間人何の誰と、自分自分の姓名を記し、額上には葉竹をさして、夫に五色の紙にて作りたる短冊を数十片結びつけ、甚にぎやかなる制作なり。其外富有の者は大きくこしらへ、作りものは吾が邦と同容なれ共、台は祭の台のごとくに組んで、其内にて太鼓・小太鼓・笛・鉦・三味線などにて拍子を取り、予がねぶたの囃子とは大に異にして勇ましからず。偕、此大小の物、夫々の師匠の邸前に持運び、青竹の埒を結て轟々と押立、添るに紅白の紙を三、四間の長さに継ぎ、星合の詩歌などを書いて、高く竹を架して是に懸ること数十枚、翻々として甚見事なり。小児等は太鼓・笛・乱拍子にて立騒ぎ、廳て暮に及ぶ比より師匠は羽織袴にて帯刀して先に立、脇には十八、九、二十許の者{学成て自家に帰りしもの也}」六、七人許、同じく羽織袴にて付添ひ、続いて此小児どもみな縮緬の襦袢に、同じく巾褌をかけて背後に結びさげ、股引・足袋に白の手拭を鉢巻にし、最美麗の促装にてねぶたを持ちもあり、綱を曳きも有て、二十人、三十人も揃ひ、色々の囃子を同音に謡ひつれて歩行く形勢、勇ましくも愛らし{此囃子先句は百般なれ共ただオオイヤイヤヨと云なり}。此次には女の子共等、同じく縮緬・上田縞等の単衣に錦織の帯をしめ、髪飾り奇麗にして顔に白粉を彩り、十人、二十人手を取かはして、ぞめき歩行き。跡には乳母とおぼしきもの伊達なる作りにて付願ひ、其次は巨大のねぶたにて十人、二十人、或いは四、五十人持のもの、車にて曳くもあり、担ぐもあり、

此者どもは看ばん、或は浴衣なれ共、一組づつ一統の模様にて家々の灯燈を先にたて采幣ふり、世話役と云者は己が様々の衣服を着飾り、扇を揚て躍り歩行き、興を尽して駈廻り、賑なる事云べくもあらず。此往来先ず御奉行の門前に至り、諸吏の邸下を過て市中に至る。其間みな師匠及高弟の先立なれば、喧嘩・口論と云ことなく穩に治るなり。且説、富有の者等この巨なるねぶた称し、花と号て酒肴・菓子などを贈るに {進上、酒一樽御進中様〇+}。斯のごとく半紙に書て与ふるに、其紙をねぶたの台に幾枚も貼つけ、数多きほどは手柄となり、翌る七日卓午過より又右の通りに繰出し、其形勢宵にひとしく、百般の興有て市中を廻り、仕まひて後は海に投じて祝ひしなり。是をねぶた流しと云ふ。茲に於て、貰ひし酒肴を以て宴席を開き、各酔を尽して帰れり。又此日師匠の宅にて強飯を焚き、肴を調ひ小兒等を歓待せり。又六日の夜は、市中みな燈籠を下げ、強飯などを焚て祝ひしなり。

- ・知内町史（1986）pp1019：民俗芸能として七夕踊りの記載。七夕の舞ともいわれる。明治・大正に白神、吉岡、福島などに伝わる子供の芸能。村の祭りに奉納したり、村の中を太鼓や鳴り物、笛の音に合わせて練り歩く。原型は青森県今別に保存されているという。
- ・新知内町史 I（2015）pp90-94：町内の七夕行事として、「七月七日 七夕祭 今も盛んであるが昔はこの日、ソーメンや水白玉などのご馳走が作られた。また旧暦の七月の盆には、一日七回子どもは水浴すると丈夫になるという旧慣があった。七夕の日は数々の自作の燈籠、提ちんにろうそくを灯して町中を練り歩く」「七月七日 明治の頃、松前、福島、知内の海岸部の集落で七回水浴すると病気にならない丈夫な体にあるというので、子ども達は海岸で水あびした。この日、笹に色紙を付けて、ろうそくやお金をもらってあるいた」と「知内町史」（1986）を引いている。また、平成の聞き取り調査絵をいくつか記す。そして「知内の七夕行事は、かつては短冊をつけた笹竹を飾った灯籠やカンテラを作り、ろうそくをねだる囃しことばを唱えながら町を練り歩くという、子どもを中心とした年中行事でした。その後、灯籠は姿を消し、子どもたちがお菓子などをもらって歩く「ろうそくもらい」という、北海道の広い地域で見られるものと同じような行事となって」といったことが書かれている。そして、青森のねぶたとの関連性を推測している。

他に、松前紀行を引いて函館の行事も紹介。松前と函館の七夕行事と青森のねぶた流しとの共通点を上げ、知内も含めて青森のねぶたにルーツがあると考察。青森のねぶたの歴史を紐解いて、江戸時代後半に津軽海峡を渡ったと推測している。

また、知内、松前、函館、小樽のろうそくもらいと下北の川内、津軽の小泊のねぶたの囃子言葉を比較し類似性を提示。ろうそくもらいは、「家々を回り歩くというねぶたの行事が子どもの習俗として根付いたと考えてよい」と結論付けている。

最後は知内や福島町の「七夕踊り」関連の行事と津軽地方の行事を比較して、青森とのつながりを記す。青森のねぶたと東北や北陸地方の日本海側との関係性に着目し、滑川の「ねぶた流し」、能登半島の「きりこ」、新潟県西浦原郡弥彦神社の「燈籠祭り」などの類似する祭りを挙げている。この部分の執筆者は清野耕司氏。

- ・松前藩と松前 27 号 (1987) pp61 : 松前の歳時記の記事の中で、八月七日の七夕祭りの記載。笹竹に短冊を下げる、仏様にきゅうりで作った馬を備えることなどが書かれている。そして、「夕方には、小田原ちょうちん、またかん詰の空きかんに、釘で小さな穴を開けて作ったちょうちんなどをもって一軒一軒歩きまわって、ローソクをもらった」と書かれている。

## (2) 北海道新聞社のデータベースでの調査

### 1) 調査対象

- ・北海道新聞データベース : 1988 年 7 月以降の地方版を含めた記事を検索可能。有料。  
※札幌の中央図書館と図書情報館では、このデータベースを 1 回 2 時間の限定ではあるが無料で検索することができる

### 2) 調査方法

- ・札幌市図書情報館 (札幌市中央区北 1 条西 1 丁目札幌市民交流プラザ 1・2 階) 設置のデータベース端末を使用して実施。
- ・2017 年から 2022 年 8 月の調査日までの最近 6 年間に時期を限定、検索ワード「七夕」として検索をした。

### 3) 調査の結果

合計 41 件ヒットし、函館のろうそくもらい関係が多くを占めた。17、18 年までは各地の行事も見られるが、なぜか 19 年は基本的に函館関連のみ。20、21 年はコロナ禍により記事の数も減っている。22 年は検索日が 8 月 9 日なので、直近の行事を含めて今年の七夕関連をすべて網羅しきれていないと思われる。

#### ①2017 年－13 件

- ・函館の新聞販売所ろうそくもらいの花火プレゼントについて (3/23、函館・渡島・桧山版)
- ・函館の七夕文化を残そう。街づくりのセミナー行事 (6/27、函館・渡島・桧山版)
- ・ろうそくもらいの七夕の日近づく (6/28、函館・渡島・桧山版)
- ・故郷函館のろうそくもらいについて、北見にて (7/5、北見・オホーツク版)
- ・道南と他地域の七夕行事の類似点 (7/7、函館・渡島・桧山版)
- ・7/7 の室蘭市内のろうそくもらい (7/8、室蘭・胆振版)
- ・7/7 の函館市内や七飯町のろうそくもらい (7/10、函館・渡島・桧山版)
- ・8/7 に復活するニセコのろうそくもらい (8/1、小樽・後志版)
- ・8/4 14-16 時にある小樽堺町のろうそく出せ (8/3、小樽・後志版)
- ・8/5 の新冠東町自治会恒例のろうそく出せ (8/6、苫小牧・日高版)
- ・8/7 の由仁町の保育園でのろうそくもらい (8/8、空知版)
- ・8/7 の枝幸町の子ども会七夕祭り。提燈を手に市街地を歩く (8/10、留萌・宗谷版)
- ・7/7 に函館の販売所に来たろうそくもらい (8/24、函館・渡島・桧山版)

②2018年－8件

- ・7/7に函館美術館ではやし歌を歌うとお菓子配布(7/5、函館・渡島・桧山版)
- ・7/7の函館市内のろうそくもらい(7/8、函館・渡島・桧山版)
- ・7/7に合わせた函館市内各所の関連行事(7/11、函館・渡島・桧山版)
- ・短歌コンテスト作品を引いて今日は七夕(8/7、全道版)
- ・8/3の新冠町での恒例のろうそく出せ(8/8、苫小牧・日高版)
- ・8/7の雨竜町でのろうそくもらい復活、昭和30年代廃れる(8/9、空知版)
- ・8/7の枝幸町の子ども七夕祭りで山車10台引き巡行(8/16、留萌・宗谷版)
- ・ろうそくもらいを引いて季節の移りのコラム(9/25、全道版)

③2019年－7件

- ・浦河で地域のつながり事例で函館のろうそくもらい紹介(3/3、苫小牧・日高版)
- ・ろうそくもらいにまつわるコラム(6/24、函館・渡島・桧山版)
- ・函館でろうそくもらい活用の世代間交流の取り組み(6/27、函館・渡島・桧山版)
- ・松浦武四郎「秘女於久辺志」の松前の七夕行事記載(6/28、函館・渡島・桧山版)  
※松前町の元学芸員、前田正憲氏によるレポート。
- ・7/7のろうそくもらいを前に函館市内各所で七夕コーナー(7/3、函館・渡島・桧山版)
- ・7/7に函館中央署が安全願い啓発グッズ配布(7/9、函館・渡島・桧山版)
- ・函館在住者によるろうそくもらいについて読者投稿(7/18、函館・渡島・桧山版)

④2020年－5件

- ・函館でコロナ禍で教員がろうそくもらい自粛呼びかけ(5/28、函館・渡島・桧山版)
- ・7/4に函館教育大でコロナ禍の新スタイル七夕(7/3、函館・渡島・桧山版)
- ・7/7に函館でお菓子食べて七夕気分、コロナ禍(7/13、函館・渡島・桧山版)
- ・旭川市在住者のろうそくもらいの思い出読者投稿(8/7、全道版)
- ・旭橋みずほ通り商店街の思い出とろうそくもらい(12/2、旭川・上川版)

⑤2021年－4件

- ・函館で今年もコロナ禍でろうそくもらい自粛呼びかけ(6/18、函館・渡島・桧山版)
- ・7/7にオンライン七夕を函館夢プロジェクトが開催(7/2、函館・渡島・桧山版)
- ・七飯町青年部ろうそくもらい自粛でお菓子を児童に配布(7/8、函館・渡島・桧山版)
- ・7/7函館市内13町内会が七夕感じてとお菓子配布(7/13、函館・渡島・桧山版)

⑥2022年－5件

- ・感染減で函館はろうそくもらい自粛呼びかけず(6/23、函館・渡島・桧山版)
- ・ろうそくもらいの絵本を絵本カフェ店主が紹介(7/7、函館・渡島・桧山版)
- ・7/7函館市内でろうそくもらい3年ぶりに楽しむ(7/8、函館・渡島・桧山版)
- ・道南のニュースまとめで、上記の記事の再掲(7/15、函館・渡島・桧山版)
- ・ろうそくもらいや夏のイベントが復活(8/3、函館・渡島・桧山版)

### (3) 調査のまとめ

市町村史誌は数があり、まだまだゴールは見えていないが、それでも記述を拾っていくと、実に多くの地域でろうそくもらいが行われている、あるいは行われていたことがわかる。道南の自治体は函館、松前、知内を軽く調べただけであるが、青森ねぶたとの関連性の記載が実に多く、文化流入の経路を物語る文献証拠となりそうである。

今回意外であったのが伊達市の史誌であった。我が家は父親が豊浦町、母親が伊達市生まれ・育ちであり、室蘭や登別で生活をした後、自分が4歳の時に旭川に転居した。そこで初めてろうそくもらいを知った（突然8月7日の夜に子供たちが押し寄せて意味が分からなかったらしい）という。この話を聞いていたので、伊達市と豊浦町のある胆振地方では、ろうそくもらいは行われていないものだとばかり思っていた。しかし、14ページに挙げたように、伊達市内でも行われていたとのこと。同じ市内でも地域差はあるが、やはり史誌調査は新しい知見を提供してくれると実感をした。

また、旭川市史からは、かつて旭川で歌われていた歌にも、「竹に短冊 七夕祭り」あるいは「今は豊年、たなばたまつり」という頭の部分があったことがわかる。これは、小樽などの歌詞と同じであり、函館にも通じるものである。これまでは、函館の「竹に短冊系」と、その他多くの地域の「かっちゃんぞ系」の二種類は別のルーツがあると考えていたが、どこかの時点で函館や小樽の歌詞から頭の部分が取れて後半が残り、その後半部分が行事とともに道内各地に伝播したのではないかと、この思いも抱くようになった。これも、今後さらに調べていく課題である。

新聞社のデータベースは函館についての記事が圧倒的に多いが、枝幸町、旭川市、雨竜町、新冠町、ニセコ町、室蘭市でのろうそくもらいの事例を新たに知ることができた。今後の現地調査に赴く際の目当てができたことは成果である。史誌とデータベース調査は、帰省や休みを利用して札幌と東京で継続していく。

## 最後に

これまでの調査の振り返りと、今後の調査への抱負もかねて、史誌調査で得た新たな視点を記してまとめに代える。

「白糠町史・上巻」(1987)のp456には、釧路の場所請負人「佐野家」の本店は函館であり、この圏域は函館と直接的な結びつきがあって函館文化圏と言える旨の記述があった。佐野家とは、天明年間に新潟県寺泊にて創業した佐野孫右衛門に始まり、北前船で海産物を中心に蝦夷地と貿易をして、釧路市から下関までを股にかけた商家である。今でも子孫が釧路市に本社を置いて事業を展開している。これまでろうそくもらいの本州からの流入や伝播については、①祇園祭との関連性、②北前船との関連性、③開拓期の入植者との関連性、④江戸期の松前藩や青森との関連性、⑤鉄道や道路開通との関連性、を疑い、道南から順に道内各地にじわじわと、或いは入植者や屯田兵によって開拓地から周辺へと広がっていったとも考えていた。この夏のテレビ特集では、青森ねぶたからの函館への流入と、新潟県村松浜から小樽への流入が取材されていたことも、その裏付けと言える。しかし白糠の事例のように、函館と釧路が場所請負人によって直接つながる商圈・文化圏であるとすると、道内のほかの場所でも直接、本州や松前などから文化が流入した可能性がある。函館文化圏が道内に飛び地のように存在しているのならば、函館系のろうそくもらいも、実は道内に点在する、あるいはかつてはしていたのかもしれない。白糠町史にはろうそくもらいの記述は確認できなかったが、今後は、場所請負制度の商圈と本州や松前藩文化圏との関連性も視点として持たねばならない、と思った次第である。ろうそくもらいのルーツの沼は、まだまだ深い…。

以上